市原市畑木小谷遺跡Ⅱ

2002．3

株式会社　ツーカーセルラー東京
財団法人　市原市文化財センター

序　文

千葉県市原市は房総半島のほぼ中央に位置し、北部には村田川が、南部には養老川が支流を取り込んで東京湾に流れ込み、地形的にも変化に富んだ自然豊かな地域です。このように、私たち人間にとって生活に適した環境は、市内に残る数多くの遺跡から、古(いにしえ)より絶え間なく続いていたことを、うかがい知ることが出来ます。

市原市は首都圏に位置することから、住宅造成や、交通網などの都市基盤整備を目的とした開発が日々行われています。これらの開発と埋蔵文化財の保護、さらには自然環境の保全等、各方面との調和を図ってゆくことが私たちに課せられた大きな課題であると考えます。長引く経済不況の中、今こそ埋蔵文化財に対する評価について、私たち個人個人の中で、真剣に考えなければいけない時機ではないでしょうか。

こうした時勢の中、この度、市内に所在する畑木小谷遺跡について発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。調査面積は広くないものの、遺跡からは、縄文時代早期から中・近世に至る、断続的な生活の跡が確認できました。その密度は、調査区に隣接する古墳の形状をも変える程でありました。

この報告書が学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護と理解のために広く市民のみなさまにも活用していただけることを願います。

最後に、今回発掘調査を実施するにあたり、発掘調査及び整理作業の費用についてご協力頂きました株式会社ツーカーセルラー東京はじめ、ご指導、ご協力を賜りました、千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会ふるさと文化課、そして、ご協力頂いた地元の方々に対して心から謝意を申し上げる次第であります。

平成14年３月

財団法人市原市文化財センター
理事長　　磯　田　正　嗣

例　言

1．本書は、千葉県市原市畑木字向247-2の一部ほかに所在する、畑木小谷遺跡の埋蔵文化財調査発掘調査報告書である。

2．書名については、隣接地の調査報告書である、平成10、11年度刊行の『畑木小谷遺跡』との混同を避けるため、『畑木小谷遺跡Ⅱ』とする。

3．センターコードは「セ340」であり「畑木小谷B地点」で調査を実施した。

4．調査は無線基地局の建設工事に先立って実施されたものであり、株式会社ツーカーセルラー東京（代表取締役社長　中山一　東京都港区芝大門１丁目10番11号）の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人　市原市文化財センターが行ったものである。

5．発掘調査は対象面積201m^{2}の本調査である。

6．発掘調査及び整理作業については、下記日程で実施した。

　　本 調 査　平成13年５月９日～平成13年６月６日　　担当者　北見一弘

　　整理期間　平成14年１月８日～平成14年２月８日　　担当者　北見一弘

7．本報告書の執筆、作成は北見が担当した。

8．石器の実測、記載については当センター嘱託職員田中大介、縄文土器の分類及び記載については当センター職員牧野光隆の協力を得た。

9．調査区より北側に広がる、畑木向４号墳の等高線図作成にかかわる一連の現地作業について、地権者の御理解と御協力を得た。また、本書を作成するにあたり、当センター職員の助言、協力を得た。この場を借りて謝意を表したい。

凡　例

1．遺構図面の縮尺は、1/40、1/80を、遺物については1/3を基本としているが、遺構、遺物の大きさ、性格を鑑み、必ずしも徹底はしていない。これらの例外については、その都度、図中に縮尺を明記している。

2．図中の方位は座標北である。

3．使用したスクリーントーンについては、凡例を示していないため、図中に対応する記載をしている。

4．遺物実測図中、表裏拓本を掲載しているものについいては、むかって左側に外面の、同じく右側に内面の拓影を配置している。

5．遺構番号については、調査時のものを使用している。001～012迄番号を付与しているが、整理作業段階で、008・009を、007と同遺構と判断し、欠番とした。

本文目次

序　文
例　言
凡　例
第１章　序　説……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　遺跡の位置と歴史的環境……1
第２章　調査成果……5
　第１節　遺跡の概要……5
　第２節　遺構と遺物……5
第３章　小　結……17

挿図目次

第１図　畑木小谷遺跡と周辺の遺跡……2
第２図　畑木小谷遺跡の周辺地形図……2
第３図　畑木小谷遺跡全体図……3
第４図　畑木小谷遺跡Ⅱ全体図……4
第５図　畑木向古墳4号墳等高線図……6
第６図　010A・B遺構遺物実測図……7
第７図　011遺構遺物実測図……7
第８図　012遺構遺物実測図……8
第９図　003(畑木向４号墳)遺構遺物実測図・9
第10図　002遺構実測図……10
第11図　004遺構実測図……11
第12図　005・006・007遺構遺物実測図……13
第13図　遺構外出土遺物実測図（１）……14
第14図　遺構外出土遺物実測図（２）……15
第15図　石器実測図……16

写真図版目次

第１図　遺構写真
第２図　遺構写真
第３図　遺構写真
第４図　遺物写真
第５図　遺物写真

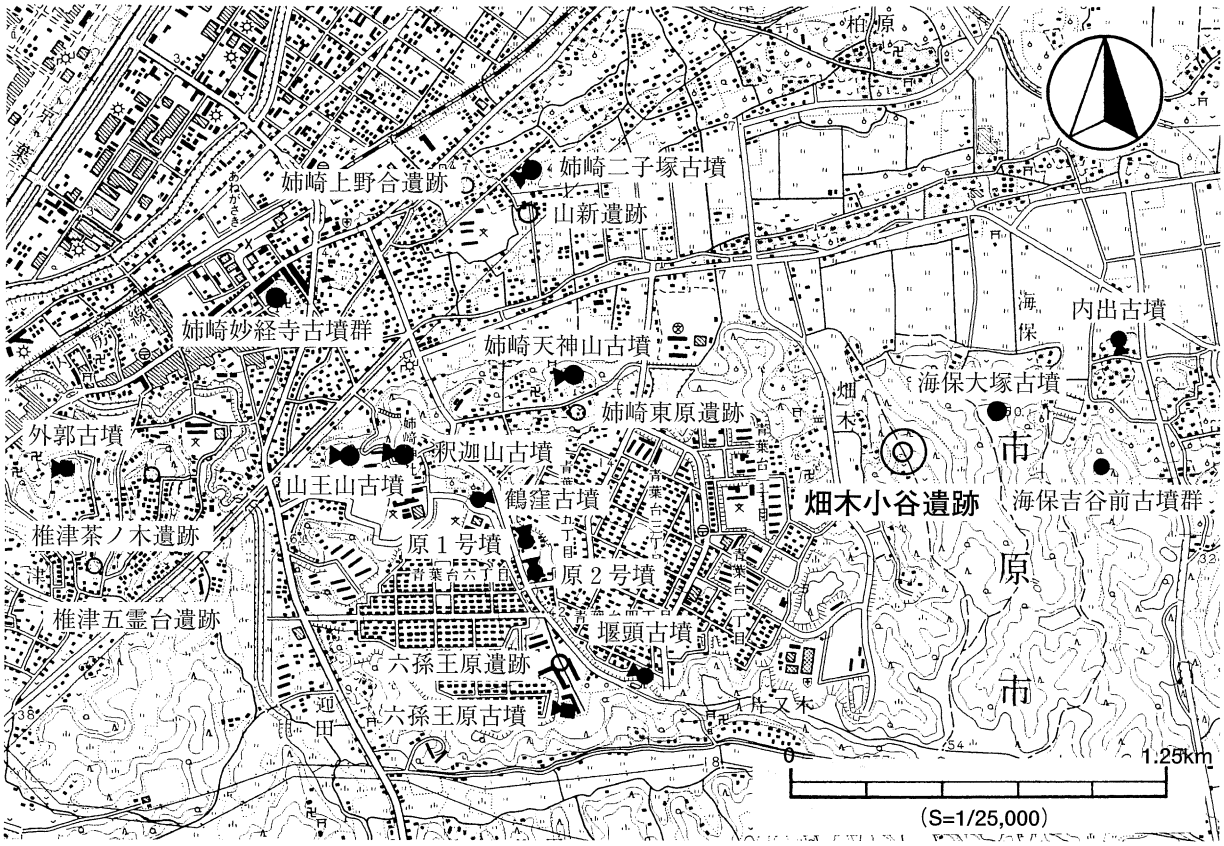
第1章　序　　説

第1節　調査に至る経緯

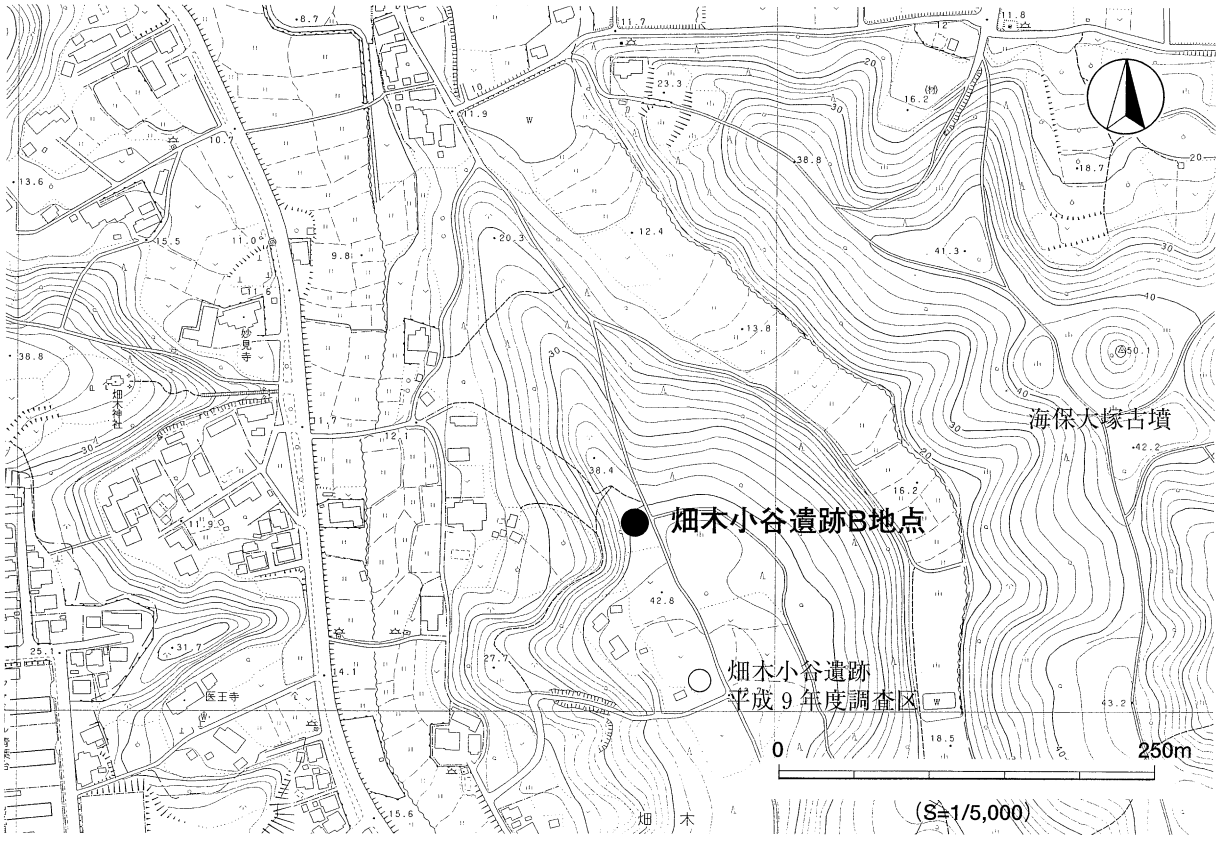
畑木小谷遺跡の発掘調査は、千葉県市原市畑木字向247－2の一部における無線基地局の建設工事に先立って実施された。工事の着工に先がけ、千葉県教育委員会教育庁及び市原市教育委員会教育長宛に、株式会社ツーカーセルラー東京より、同地点における埋蔵文化財所在の有無及びその取り扱いについての照会が出された。これを受け、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課、株式会社ツーカーセルラー東京の3者により、協議がなされ、その結果、同地点の埋蔵文化財については、記録保存という取り扱いとなったため、発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査遺跡の位置と環境

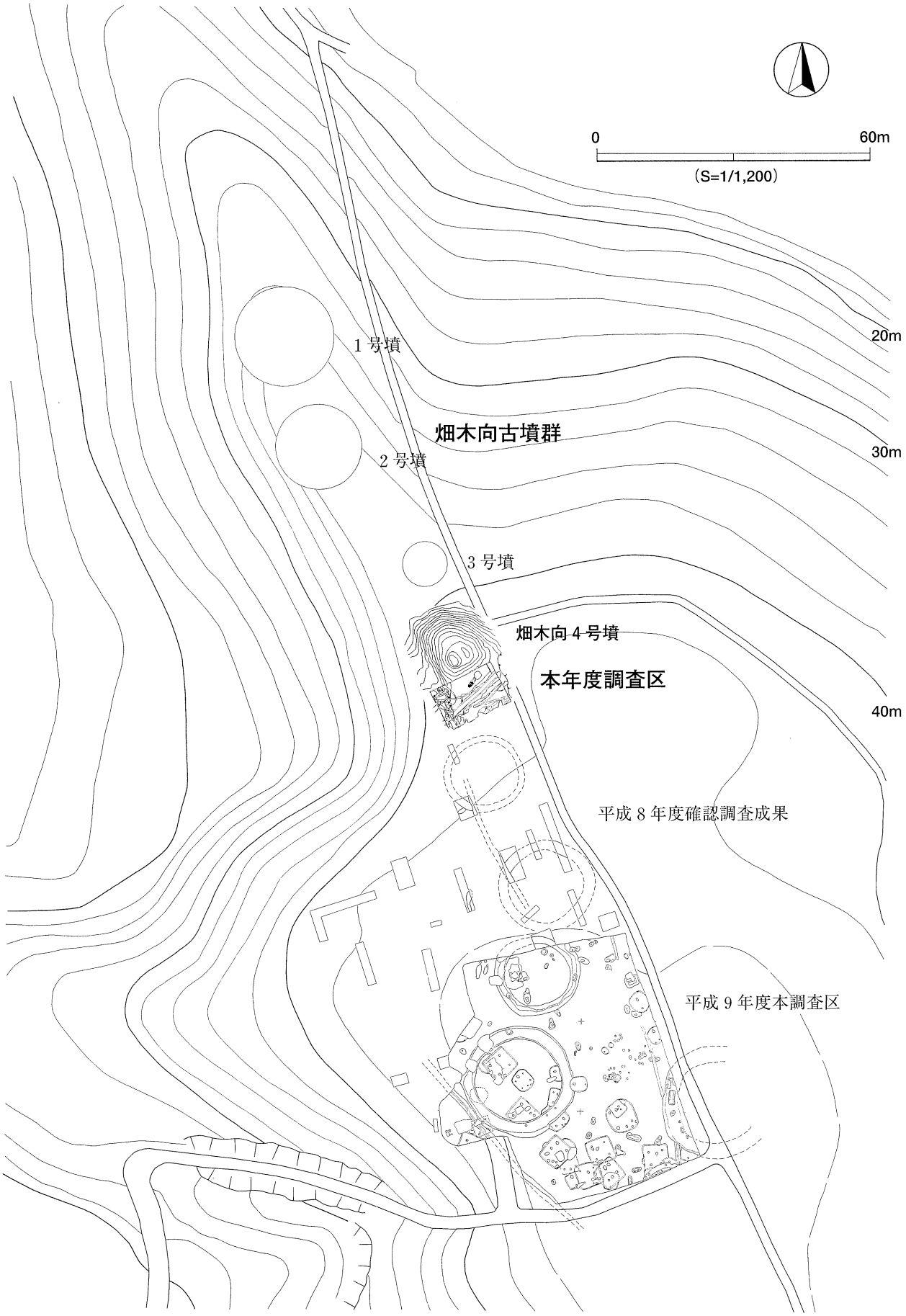
市原市は千葉県をなす房総半島のほぼ中央部に位置する。本地域の地形的な特徴を概観すると北からは、いわゆる下総台地が収斂し、南に上総丘陵が広がる地勢を成す。本遺跡の位置する台地は、通称袖ヶ浦台地と呼ばれ、国分僧尼寺の置かれた市原台地とは養老川を挟んで向かい合う位置にある。この袖ヶ浦台地は、上泉-川原井-高根を結ぶラインから北西方向にかけては、広い台地面が展開するが、遺跡周辺は、小河川による浸食が進み、台地を分断して、南北方向に細長く伸びる樹枝状を呈している。遺跡はこうした台地上の僅かな平坦面、標高41mほどに位置する。周辺は『和名類聚抄』にみえる海上郡馬野郷に比定される地域で、姉崎天神山古墳をはじめとする首長墓群である、姉崎古墳群が展開する。本遺跡の位置する台地上には、痩せ尾根上に畑木向古墳群があり、隣接地の調査により、不確定ながらも、5世紀末の円墳を含む、9基の古墳が確認されている。これまで、周辺地域の調査は多くはなかったが、近年、台地と東京湾の間に展開する砂堆列上の調査が実施されており、縄文時代晩期をはじめとして、弥生時代中期、古墳時代中期～後期、中世に至る、生活の足跡が確認され、資料の蓄積がなされている段階である。



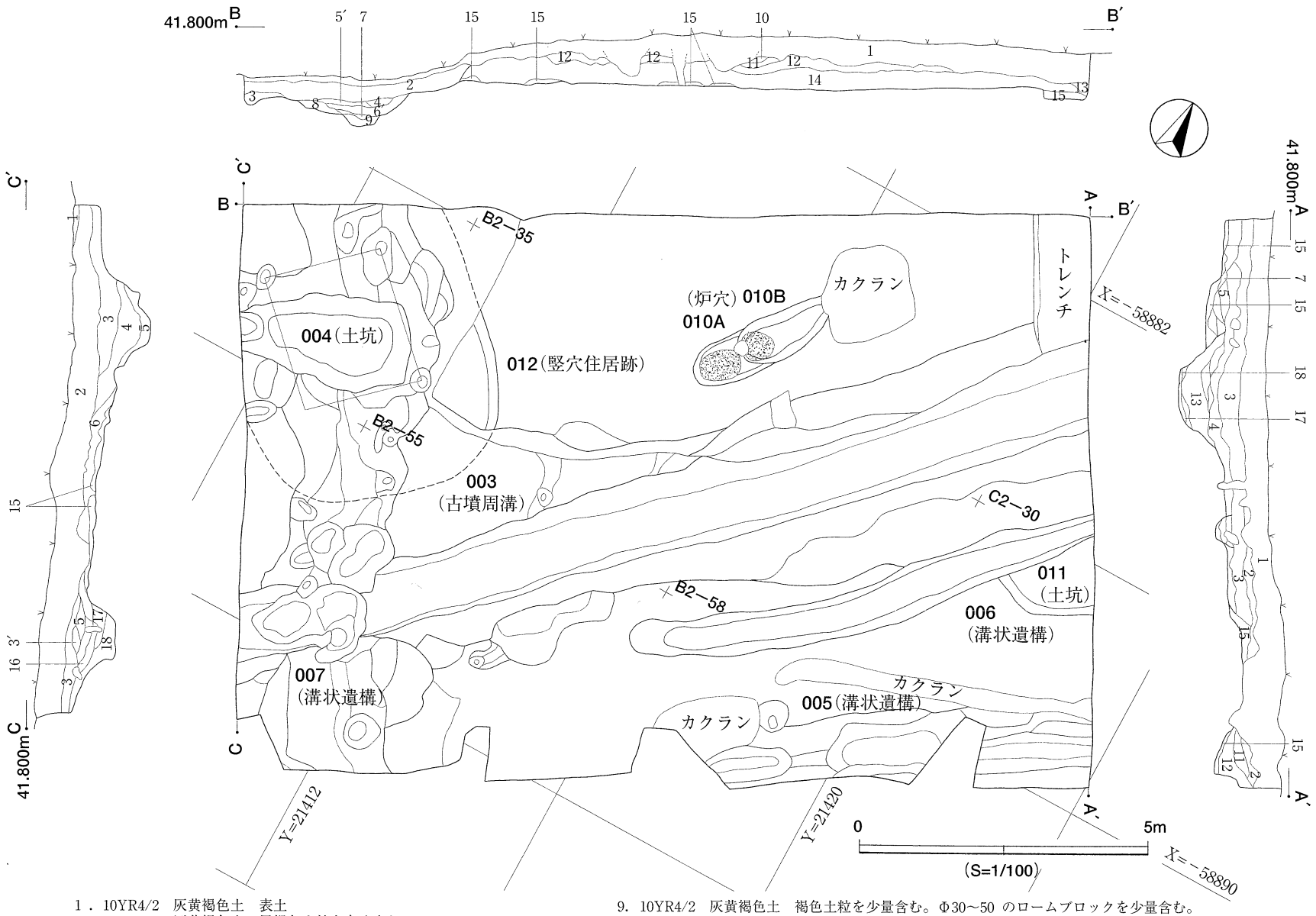
第1図　畑木小谷遺跡と周辺の遺跡　（国土地理院発行1/25,000地形図）



第2図　畑木小谷遺跡の周辺地形図　（市原市発行1/2,500基本地形図）



第 3 図　畑木小谷遺跡全体図



1．10YR4/2　灰黄褐色土　表土
2．10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土粒を多く含む。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土粒を少量含む。
3′．10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土粒を少量含む。焼土粒を微量含む。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土粒を多く含む。
5．10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土粒を微量含む。
5′．10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土粒を微量含む。よく硬化している。
6．10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土粒を少量含む。
6′．10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土粒を少量含む。硬化している
7．10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土粒･黒褐色粒を多く含む。
8．10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土粒を少量含む。ロームブロックを少量含む。
9．10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土粒を少量含む。Φ30～50 のロームブロックを少量含む。
10．10YR2/3　黒褐色土　φ10～20 の黒褐色粒を多く含む。焼土粒を微量含む。
11．10YR2/3　黒褐色土　φ10～20 の黒褐色粒を多く含む。
12．10YR2/3　黒褐色土　φ10～20 の黒褐色粒・φ1～3 の褐色土粒を多く含む。
13．10YR2/3　黒褐色土　φ10～20 の黒褐色粒・φ1～3 の褐色土粒を多く含む。焼土粒を微量含む
14．10YR3/3　暗褐色土　φ3～5 の褐色粒を多く含む。（上位古墳時代旧表土）
15．10YR4/4　褐色土　ソフトロームがしみ状を呈する。
16．10YR3/4　暗褐色土　ソフトローム主体。黒褐色粒少量含む。
17．10YR3/3　暗褐色土　φ1～3 の褐色粒を多く含む。
18．10YR3/3　暗褐色土　φ1～ の褐色粒を多く含む。Φ10～50 のロームブロック少量含む。

第４図　畑木小谷遺跡Ⅱ全体図

第２章　調査成果

第１節　遺跡の概要と調査方法

調査時の方眼杭は、平成９年度の調査時に設定した20m ×20m の大グリッドに従って設定している。東西方向に西から、A、B、C、D…とし、南北方向に北から１、２、３、４…と割り付け、この大グリッド内に２m×２m の小グリッドを設定している。小グリッドは東西方向に、０～９を、南北方向に00～90を設定した。本文中の表記は大グリッド-小グリッドとなる。

調査では、調査区内に畑木向４号墳の周溝及びマウンドの一部が検出される事が予想された。このため、古墳の状態を把握する必要から、全体の掘削前に現況での等高線図を作成し、それに基づき、推定した古墳の中心部に向かって、確認トレンチを２本設定した。この結果、第２トレンチからは古墳の周溝とみられる溝状遺構が検出されたものの、第一トレンチでは、この溝状遺構に対応する遺構は認められず、また、覆土も大きく異なっていた。この原因としては、まず、等高線図のコンタラインにみだれが確認出来ること。加えて第２トレンチで確認面としたソフトロームが遺存せず、ハードロームが地山となっていたことに関連するとみられ、このことはトレンチ内全体が古墳築造以降に掘削を受けている可能性を示唆するものと思われる。以上のことから、古墳のマウンド及び周溝が大きく改変されていると判断した。

この結果をふまえ、表土を除去した後、遺構の調査を開始した。この結果、縄文時代早期炉穴２基、土坑１基、弥生時代後期竪穴住居跡１軒、古墳時代後期古墳１基、時期不明土坑１基、中・近世土坑１基、時期不明溝状遺構３条を検出した。

第２節　遺構と遺物

010A　炉穴　（第６図・図版３）

位　置　調査区北東側、B２-37グリッドに位置する。　**状　況**　主軸方向はN-148°-W。入り口となる北東側に010B（炉穴）が位置するため、検出は全体の1/2以下と思われる。

規　模　遺存部は0.82m×0.78m、確認面からの深さは17cm、炉は0.73m×0.52m、堆積焼土の厚さは８cmを測る。　**その他**　010B と重複する。新旧関係は、断面において010B 内に本遺構底レベルの焼土が確認できないことから本遺構が旧と判断した。　**遺　物**　１、２、３は覆土下層から出土している。他に覆土上層より、黒曜石の石核が１点出土している（第15図５）。

010B　炉穴　（第６図・図版３）

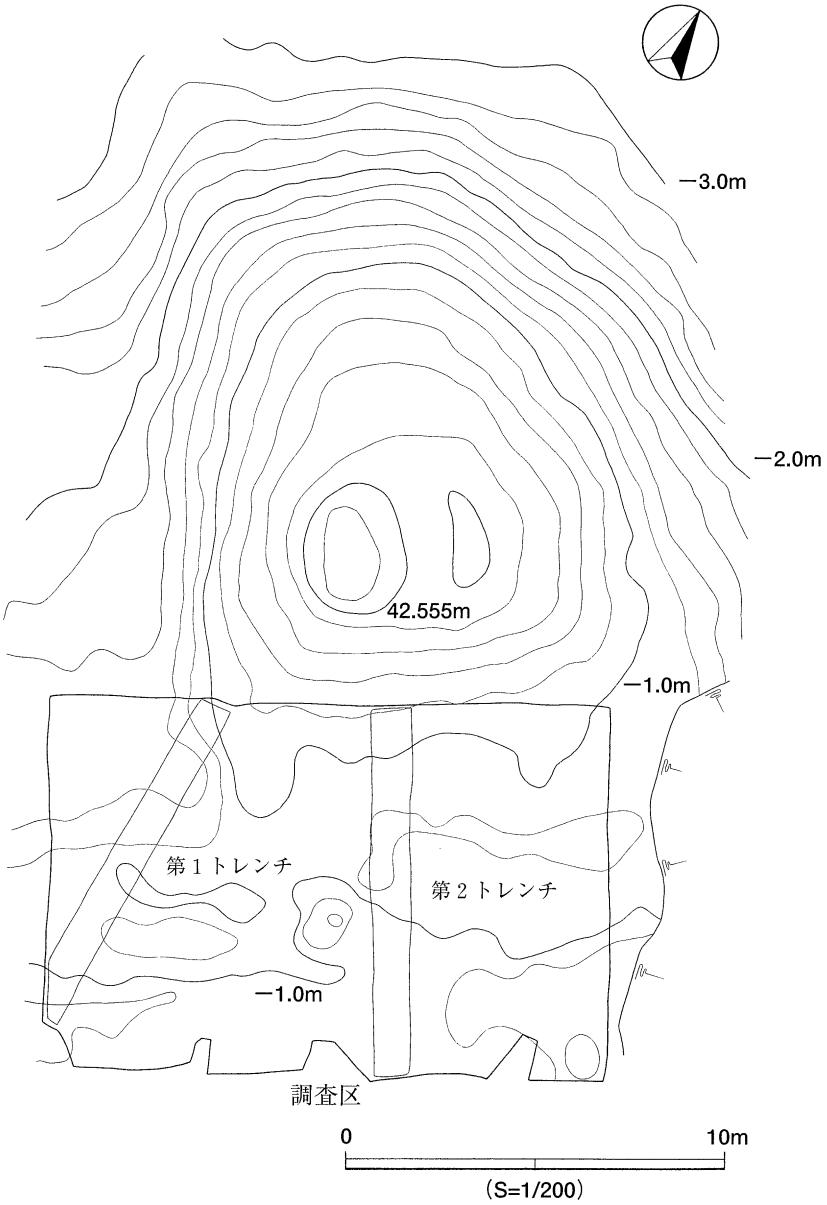
位　置　調査区北東側、B2-27グリッドに位置する。　**状　況**　主軸方向はN-150°-W。入り口となる北東側で撹乱を受ける。南西側に010B が位置する。　**規　模**　遺存部は1.68m×0.80m を、確認面からの深さは29cm、炉は0.58m×0.53m、堆積焼土の厚さは８cm を測る。　**その他**　010A との切り合い状況から、本遺構が新しい。　**遺　物**　１～３は縄文時代早期後葉の、胎土に繊維を含む土器である。１と２は同一個体であり、口縁は波状を呈する。胎土に白色の細粒が目立つ。３は口唇部にヘラ状工具による斜位の刺突が施される。擦痕調整が外面は縦位に、内面は横位に施され、部分的に工具の単位がみられる。

011　土坑　（第７図・図版２）

位　置　調査区東側、C2-31グリッドに位置する。　**状　況**　遺構の東側は調査区外となり、北側は006（溝状遺構）に切られ、遺存度は悪い。　**規　模**　遺存部で、1.5m×1.2m、深さ８cmを測る。不整楕円形を呈するものと見られる。　**遺　物**　1.石鏃が底面より4.0cm浮いた状態で出土した。覆土上層及び遺構周辺からは、繊維を含む擦痕調整の土器が少量出土しているが、小片のため図示できない。

012　竪穴住居跡（第８図･図版３）

位　置　調査区西側、B2-44グリッドに位置する。　**状　況**　004（土坑）、007（溝状遺構）、003（古墳周溝）により、床面までの掘削を受けており、ほとんど形状を失っている。主柱穴３ヶ所と、竪穴住居跡の東側壁周辺の一部が遺存するのみである。硬化面は認められない。　**規　模**　主柱穴間が、2.10m、2.44m、床面の確認面からの深さは８cmを測る。平面形は隅丸方形を呈すると見られる。



第５図　畑木向古墳４号墳等高線図

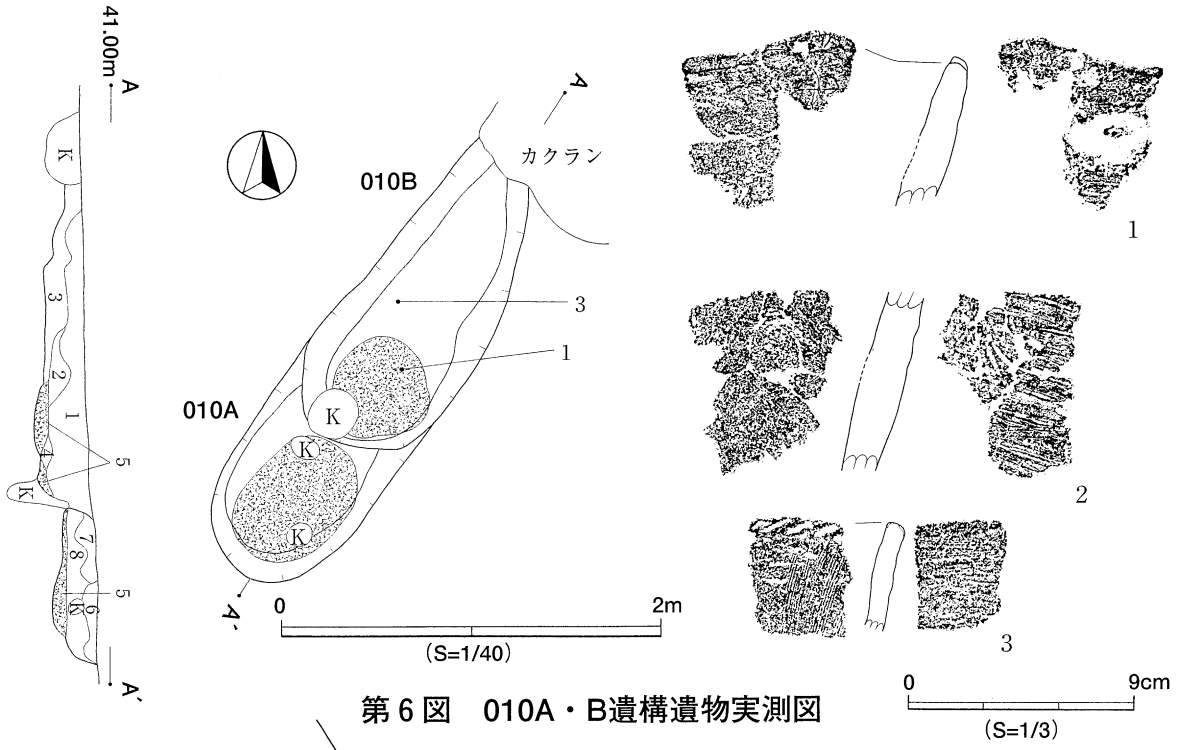
遺　物　床面直上から出土している。

１、壺頸部。複式Ｓ字結節文に区画された羽状縄文が施文され、区画より下部は、無文帯で縦位のミガキ調整、赤彩が施される。２、浅鉢口縁部。３と同個体とみられる。Ｓ字状結節文によって区画された羽状縄文が口縁部に施される。口唇部は無文で面を持つ。体部は無文で斜方向のミガキ。赤彩が施される。４、５、７、８、広口壺頸部。口縁部に単節斜縄文、下端に布目状の圧痕、４は体部に斜縄文が施される。６、鉢口縁部。粘土の貼り付けはない。外面に羽状縄文、口唇上端部は単節の斜縄文が施される。９、10、壺胴部。羽状縄文の下端を複式Ｓ字結節文で区画、沈線の山形文区画内に単節斜縄文を施文している。無文帯はミガキ調整で、赤彩されている。11、12、壺胴部。腹式Ｓ字状結節文に区画された羽状縄文が施される。無文帯は赤彩が認められる。

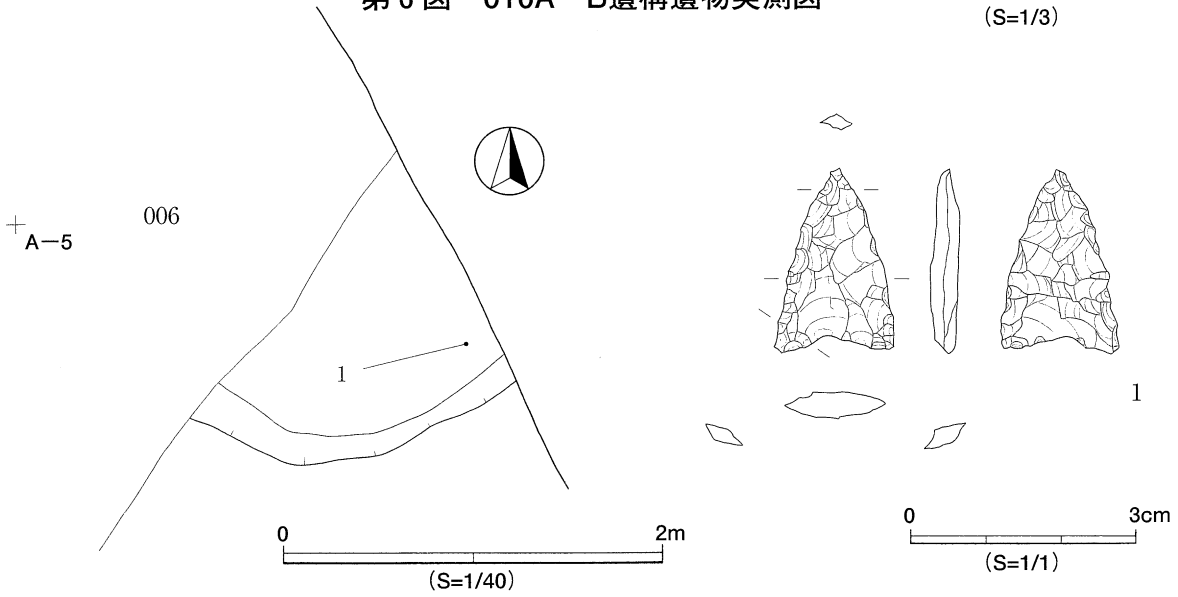
003　古墳　（第５、９図・図版１、３）

位　置　調査区の北側半分を占める位置にある。　**状　況**　等高線図（第５図）を見ると、墳丘の西

側及び今回の調査区内で、コンタラインの乱れが確認できる。このことは002、007（溝状遺構）、004（土坑）の掘削の影響を大きく受けていることに起因するものと見られる。加えて、調査区東側及び北側断面図（第４図）によると、表土が、厚く安定してみられるため、近年の耕作による地形の改変も考えられる。したがって、調査区内における墳丘及び周溝は、大きく改変され、旧形状をほとんど失っている。　**規　模**　調査区中央より西側寄りに、周溝の一部が遺存し、周溝底の幅が、2.30m を計測可能である。古墳の形状は、周溝からでは明確に出来ない。規模については、墳丘と周溝との関



第６図　010A・B遺構遺物実測図

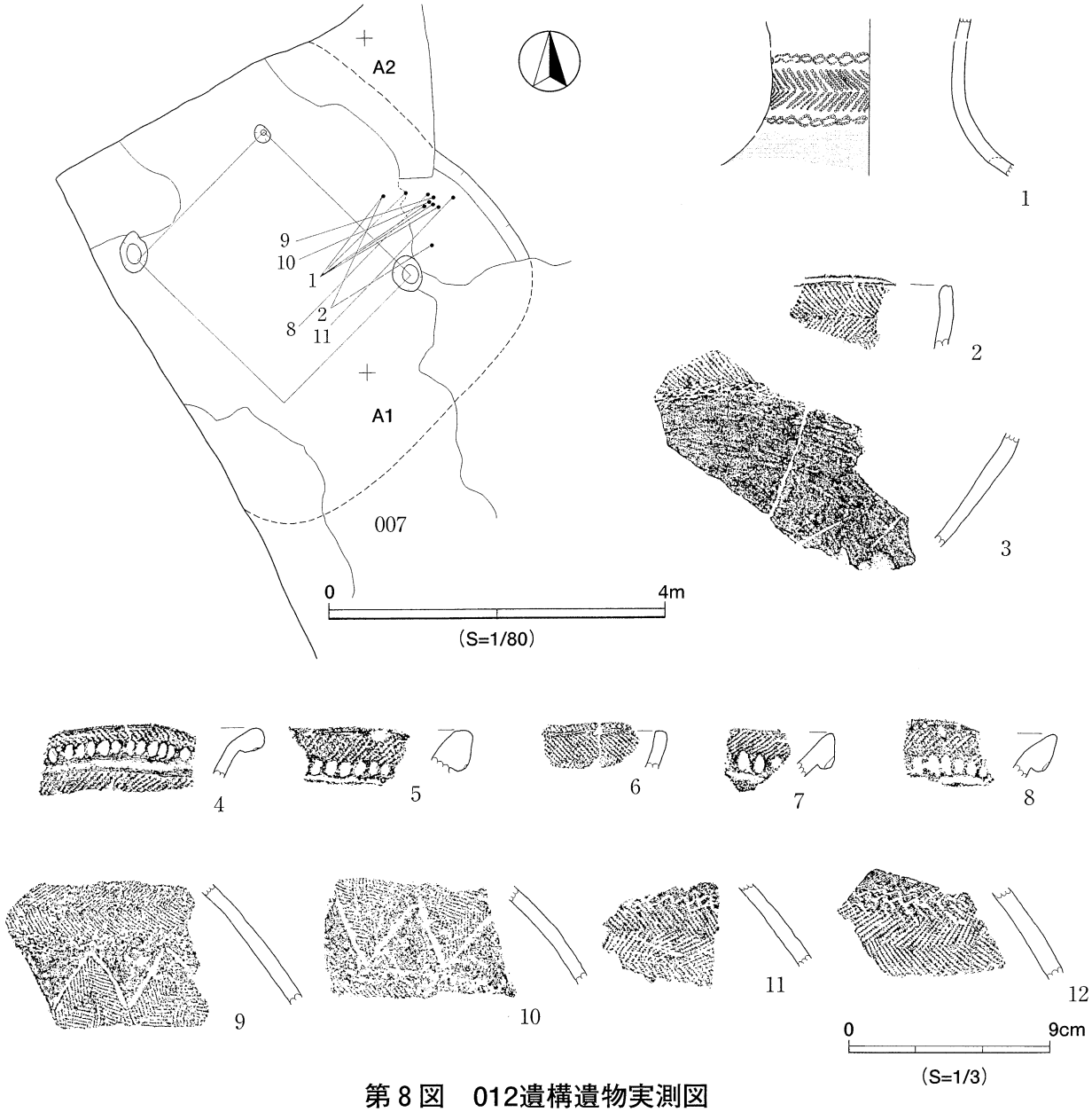


第７図　011遺構遺物実測図

係から、直径は25m を越えるものと推定できる。　**遺　物**　明確に古墳に伴う遺物は皆無である。1、小型壺形土器。外面に赤彩が認められる。2、台付甕台部か。調整は不明瞭。3、弥生土器鉢。粘土帯貼り付け部下端に棒状工具による刺突が巡っている。

002　溝状遺構　（第10図・図版1、2、3）

位　置　調査区中央を東西方向に横断する形で位置する。　**状　況**　調査区西側で、007（溝状遺構）に切られるが、遺存度は良好である。　**規　模**　遺構上端の最大幅は、3.30m、底部幅0.76～0.90m、確認面からの深さ0.7m、調査区内での全長は、15.3m を測る。　**その他**　遺構はほぼ直線的に東西方向に伸びる。底面は概ね平坦であり、調査区両端で比高差34cm をもって東側に傾斜している。断面形は逆台形であるが、底部に近い遺構下位では、傾斜がきつく、上位にいたって、やや開く形状を呈する。遺構はハードロームまで達しているが、踏みしめによる硬化部位は、覆土中にも確認できない。　**遺　物**　遺物は覆土中から若干出土しているが、流れ込みと思われるものが多い。覆土上層か

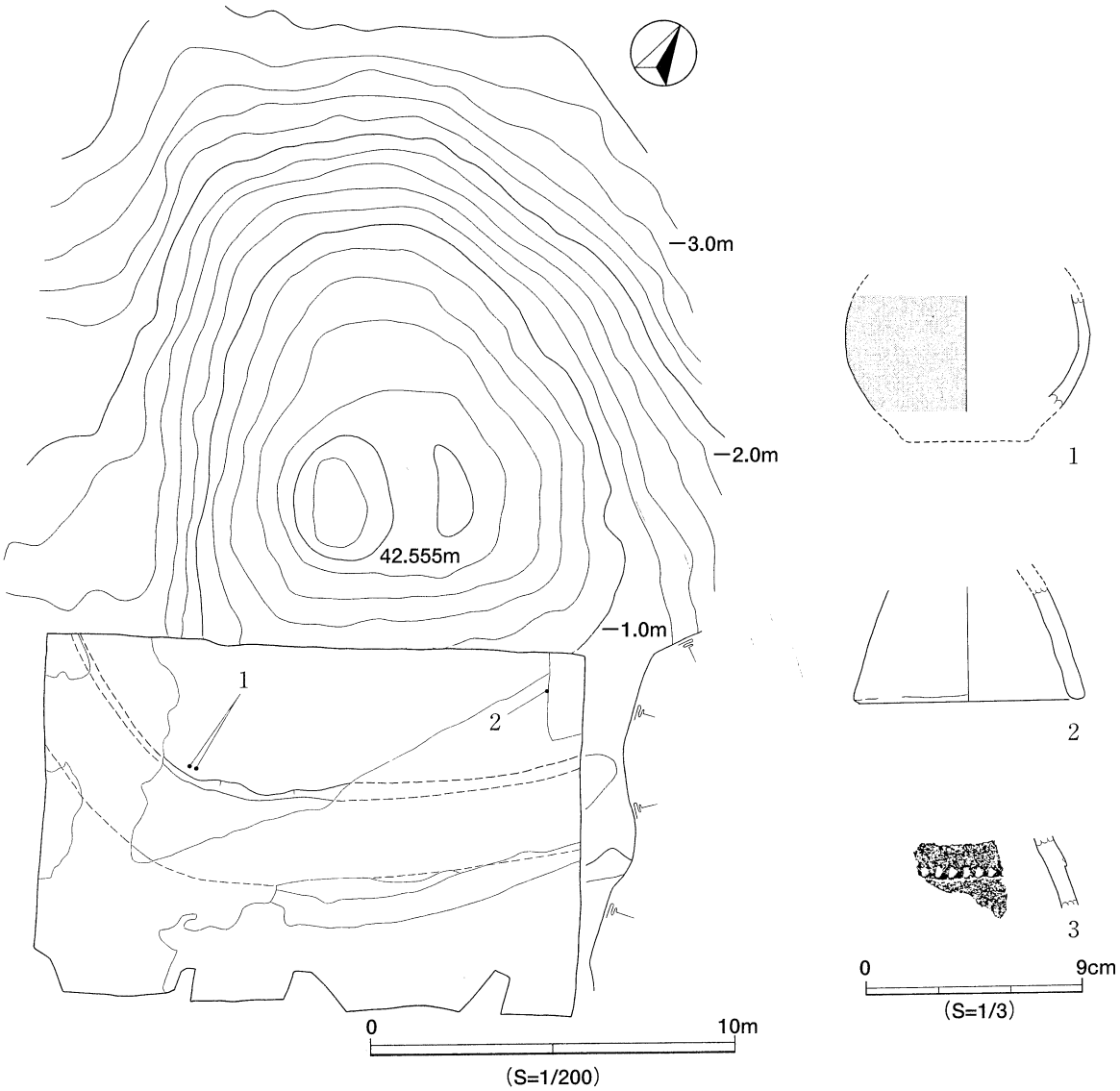


第8図　012遺構遺物実測図

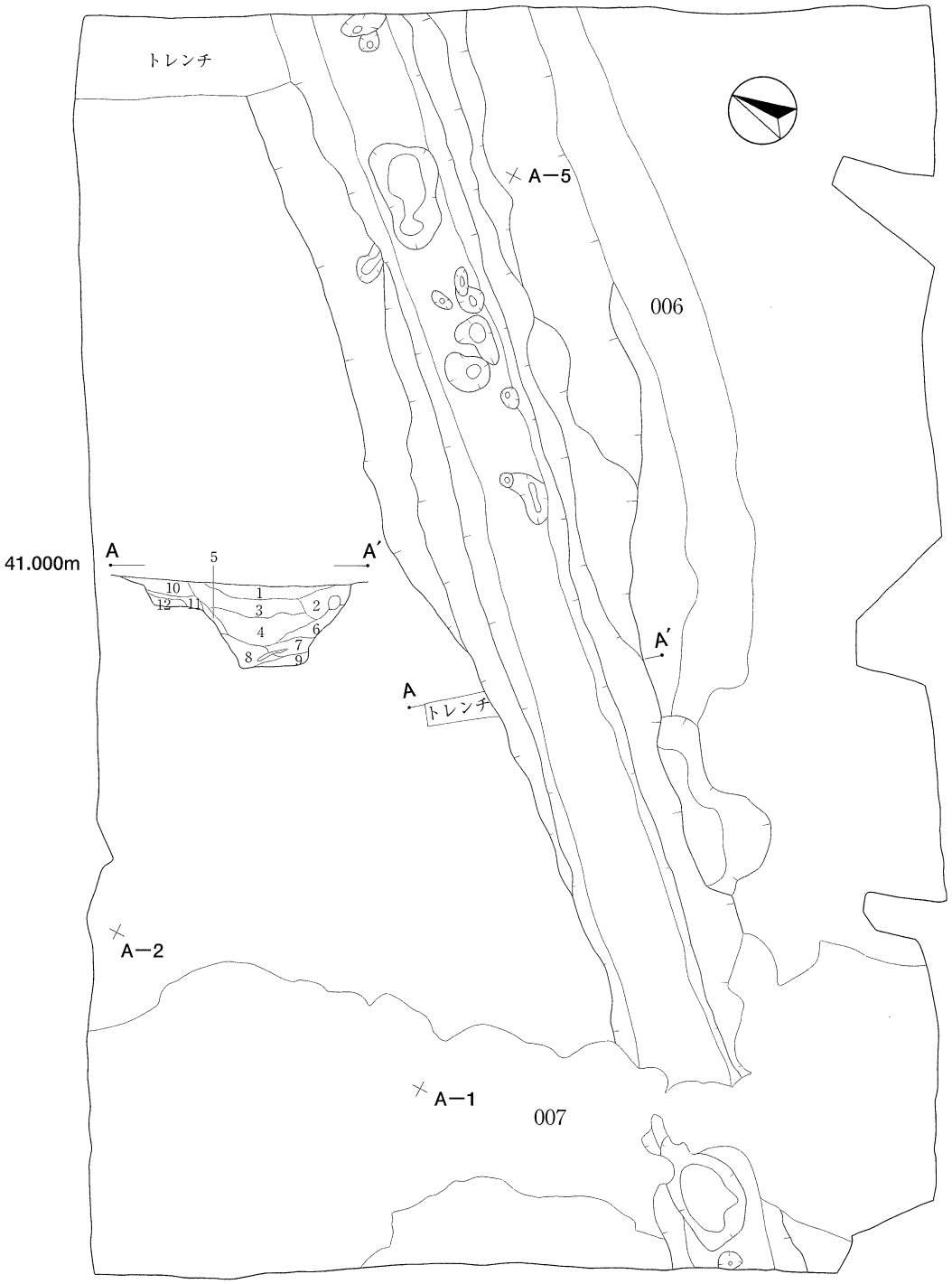
ら、常滑の甕片が出土しているが（図版２：２トレ）、小片のため時期を決定するには至らない。

004　土坑（第11図・図版２）

位　置　調査区西側、B2-44グリッドに位置する。　**状　況**　007（溝状遺構）に切られる。遺構は西側調査区外に続くものと見られる。　**規　模**　遺構上端で、2.90×1.52m、底部で、1.85×0.91m、確認面からの深さ0.87m を測る。平面形は不整楕円形だが、西側に溝状に細長く伸びる可能性がある。**その他**　底面は、平滑で、ハードロームまで達している。覆土中にも特徴的な事項は見受けられず、自然堆積と見られる。　**遺　物**　底面よりやや浮いた状況で常滑の甕片がしているが出土しているが（図版５：004-1）、時期を決定するには至らない。



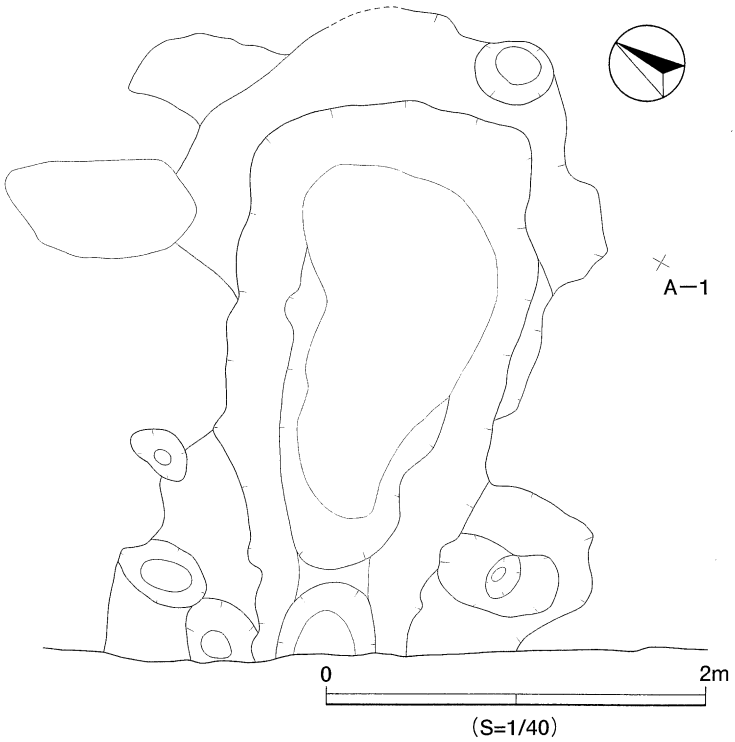
第９図　003（畑木向４号墳）遺構遺物実測図



1. 10YR2/3　黒褐色土　φ10〜20 の黒褐色粒を多く含む。
2. 10YR3/4　暗褐色土　ソフトローム主体。黒褐色粒少量含む。
3. 10YR2/3　黒褐色土　φ1〜3 の褐色粒を多く含む。褐色土がしみ状を呈する。
4. 10YR2/3　黒褐色土　φ1〜10 の褐色粒を多く含む。Φ3 ほどの焼土粒を微量含む。
5. 10YR2/3　黒褐色土　φ1〜10 の褐色粒を多く含む。ソフトロームを多く含む。
6. 10YR2/3　黒褐色土　φ1〜10 の褐色粒を多く含む。ロームブロックを少量含む。
7. 10YR3/4　黒褐色土　ソフトロームを多く含む。
8. 10YR3/3　暗褐色土　φ1〜10 の褐色粒を密に含む。
9. 10YR3/3　暗褐色土　ソフトロームがしみ状を呈する。
10. 10YR3/3　暗褐色土　φ1〜3 の褐色粒を多く含む。
11. 10YR3/4　暗褐色土　ソフトロームがしみ状をていする。
12. 10YR3/5　暗褐色土　ソフトローム主体。ロームブロックを多く含む。

0　4m
(S=1/80)

第10図　002遺構実測図



第11図　004遺構実測図

005　溝状遺構　（第12図・図版２）

位　置　C2-30グリッド周辺。**状　況**　調査区外東側に伸びる。**規　模**　全長6.60m、上端幅1.06m、底部幅0.16～0.42m、確認面からの深さ0.27～0.35mを測る。**遺　物**　１、２、炉器台。外面は弱いミガキ調整。１、２共に覆土下層から出土している。他に遺構覆土全体から土師器片が出土している。

006　溝状遺構　（第12図・図版２）

位　置　C2-50グリッド周辺。**状　況**　調査区外東側に伸びる。西側で002（溝状遺構）に切られる。**規　模**　全長8.68m、遺構上端幅0.80m、底部幅0.50m、確認面からの深さ0.15～0.22mを測る。**遺　物**　皆無である。

007　溝状遺構　（第12図・図版２）

位　置　B2-55グリッド周辺。**状　況**　002（溝状遺構）、004（土坑）を切る。調査区外南北方向に伸びる。**規　模**　全長9.00m、遺構上端幅2.56～2.03m、遺構確認面からの深さ0.52～0.36mを測る。遺構底面は、ピットが複数認められ、平坦面はほとんどない。**その他**　遺構の覆土最上層、表土直下に２面以上の硬化面が認められた。古墳の墳丘が、西側で不自然に直線的になっており、この溝の掘削時に改変されたものと見られる。近世以降、尾根筋の道として機能したものであろう。**遺　物**　皆無である。

遺構外出土縄文時代遺物（第13図・図版4）

１～４は早期中葉沈線文系土器である。２本以上の平行沈線による水平区画内に、斜格子および斜沈線を充填する。胎土に砂礫が多く見られる。36～38は胎土が類似しており、これらの胴～底部付近である可能性が高い。

５～35・39は早期後葉であり、田戸上層式から子母口式期にかけての胎土に繊維を含む土器が主体を占める。５から９は口唇部に刺突を配する。５は口縁部下位に太い隆帯がめぐる。10は内削ぎ状の口唇で、外面直下に刺突列を施す。11は水平隆帯がめぐり、外面下位に条痕調整がみられる。12～14は口唇から外面にかけて絡条体圧痕を施す。15は口唇および外面直下に貝殻背面圧痕がみられる。16は隆帯上に刺突を施す。17は角棒による刺突列がめぐる部位の輪積みで欠損している。

18～27は無文および擦痕調整の口縁部である。19・25・26は口縁が波状を呈する。22は口唇直下に微隆起線が施されていた痕跡がみられる。28～32は条痕調整がなされる。28は貝殻による条痕だが、

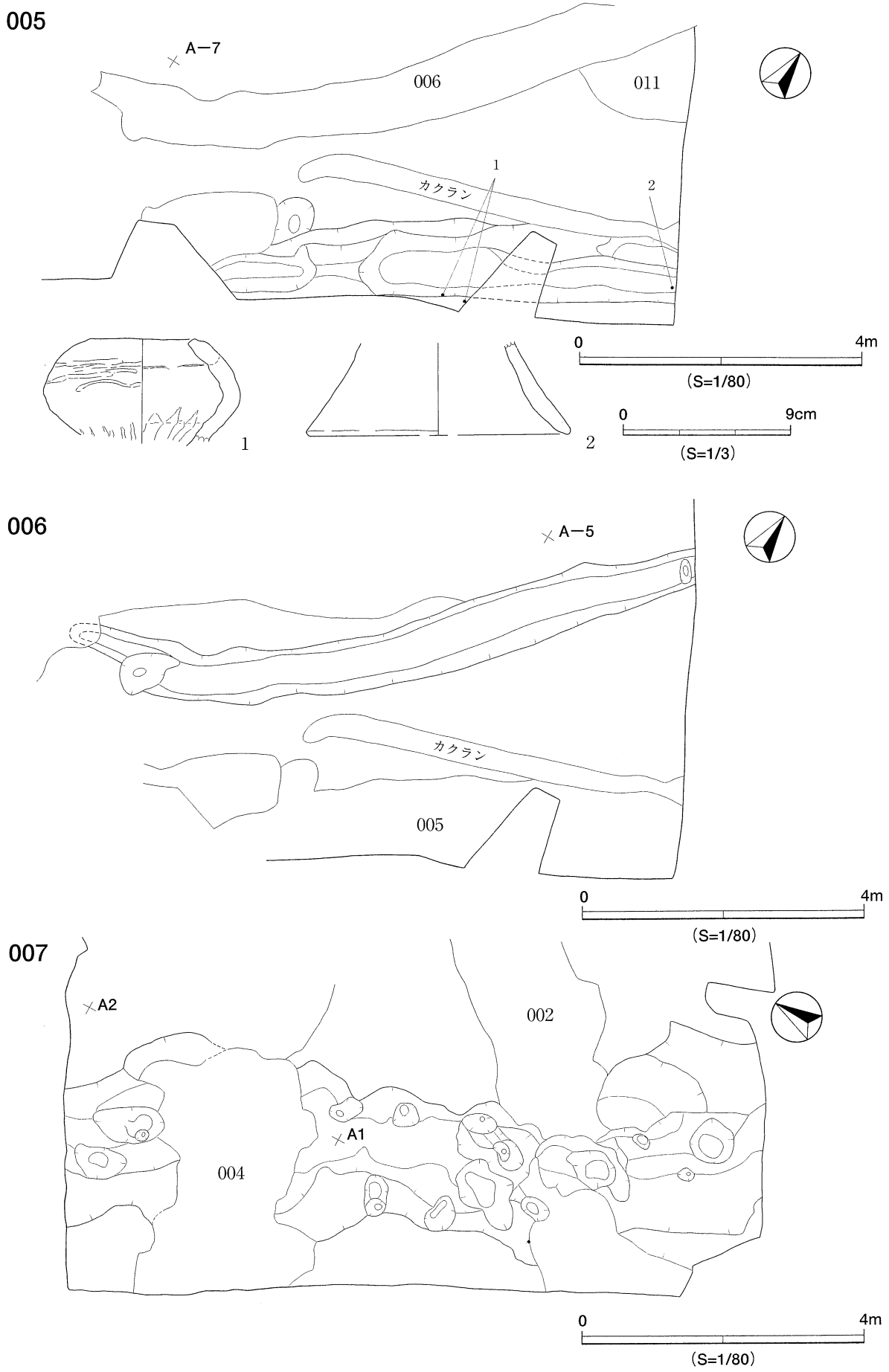
29～32は条痕の単位および断面形状が不均一であることから、円棒状工具の束によるものであろうと推測される。34は補修孔が開けられる。

遺構外出土弥生土器・土師器　（第14図・図版５）

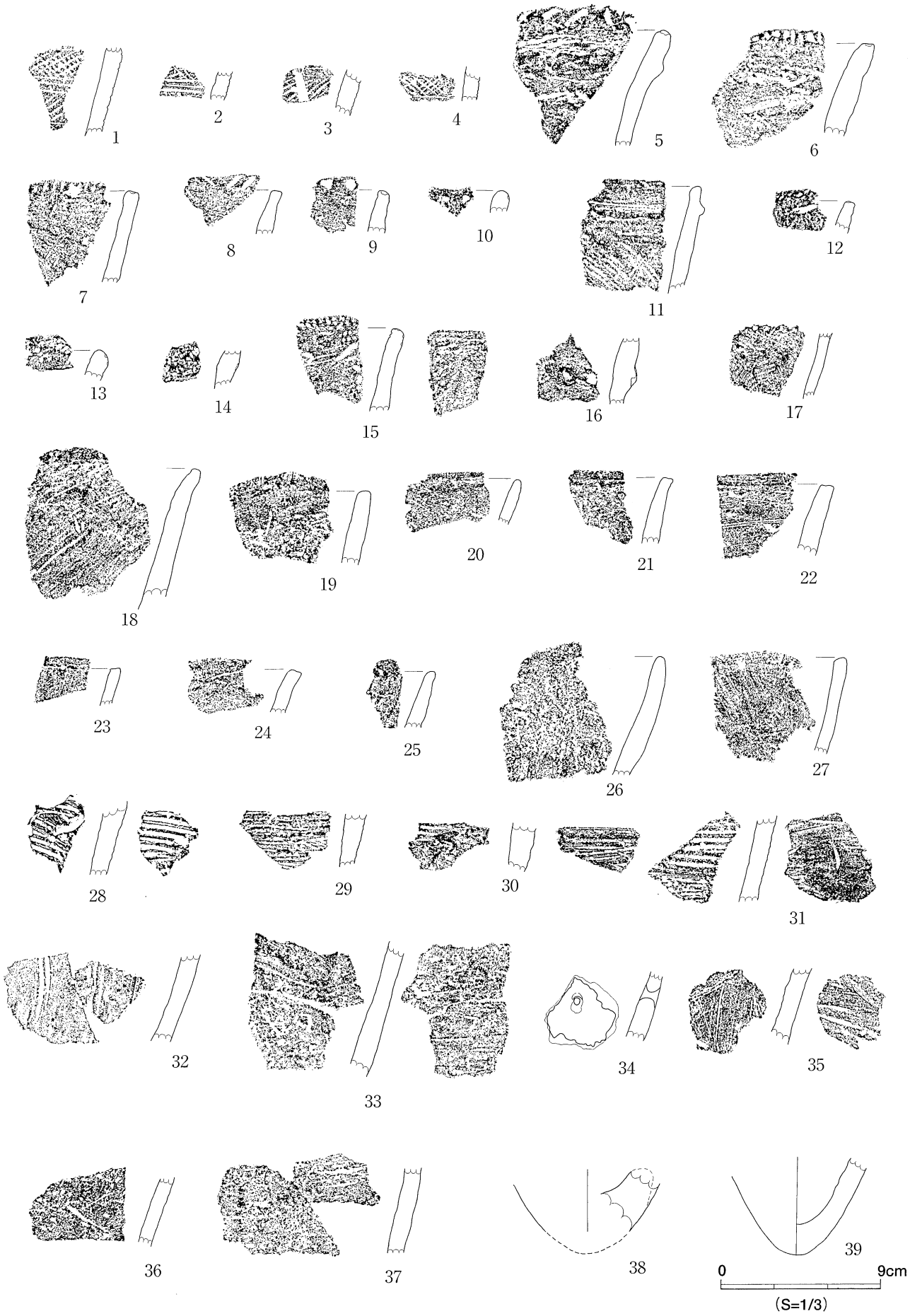
005-3. 壺口縁部。二重口縁部に羽状縄文、下端に棒状工具による刺突を施す。羽状縄文帯に竹管状の工具による刺突が施された円形浮文が1つ認められる。１～２、４、８、壺口縁部。口縁部に単節斜縄文、端部に棒状工具による刺突が施される。３、脚部。外面下端に単節斜縄文、折り返し端部にヘラ状工具による刺突が施される。５、６、壺口縁部。口縁部に単節斜縄文、端部に棒状工具による刺突が施され、２本１組の刻みが施された棒状浮文が付加される。７、壺口縁部。無文。９、は甕口縁部。上下２方向からの棒状工具よる交互刺突か。10、壺口縁部。外面に羽状縄文、口唇上端に単節斜縄文を施す。11、壺頸部。単節斜縄文帯に竹管状の工具による刺突が施された浮文が１つ認められる。12、～15、鉢口縁部。12は羽状縄文が施されるのみ。以外は単節斜縄文、折り返し端部に棒状工具による刺突が施される。16～18、壺胴部。複数条のＳ字状結節文が施される。23、24、26、壺胴部。25、27、28、甕底部。29、Ｓ字状口縁甕。頸部と胴部上端に平行方向の沈線が巡る。31、土師器蓋。つまみ部欠損。外面に赤彩が施される。33、須恵器杯蓋34、須恵器壺胴部。35、須恵器甕胴部。

石　　器　（第15図・図版５）

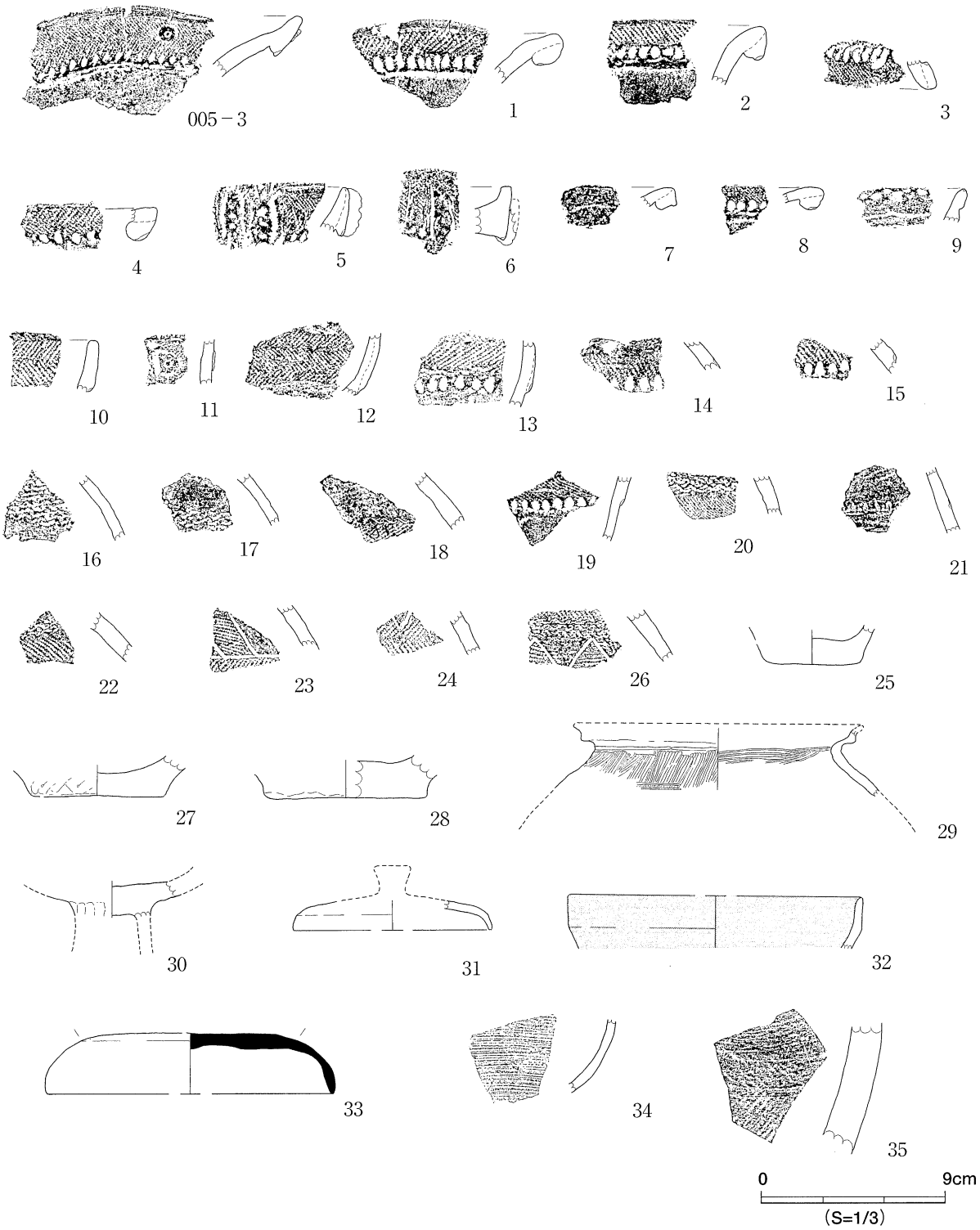
１、石鏃。基部に抉りが入る。片側の逆刺部が折損している。黒曜石。遺構外出土。　２、石鏃。折損品。残存部位の調整を見る限り、石鏃として扱えるものと思われる。折損面が調整剥離を切っていることから、製作後、或いは製作中に折損したものと思われる。黒曜石。遺構外出土。　３、石鏃。黒曜石。遺構外出土。　４、二次加工のある剥片。打面を残し、側縁に細かな剥離痕が連続的に認められる。黒曜石。遺構外出土。　５、図上の上下方向を打面とし、やや縦長の剥片を得ていたものと思われる。上下方向で、180°打面転位を行い、打縁調整が認められる。横方向からの剥離痕は、石核形状を保つための剥離によるものと思われる。黒曜石。　６、礫器か。礫あるいは片面を残す剥片を素材として、片面に集中して加工を行い、長軸の両端に刃部に相当する部位を形成していることから、礫器とみなした。上下の判断は両端とも摩滅した痕跡が認められないため不明確であるが、側面からの観察で鋭利な方を刃部と見なした。両側縁に敲打痕が認められるが（図中スクリーントーン）、剥離面より新しいと思われることから、製作段階以降の痕跡と考えられる。凝灰岩か。遺構外出土。７、軽石。複数面に磨いたような痕跡が認められる（図中スクリーントーン）。図中、ラインで示した部位は、抉入状の磨痕が顕著に見られる。005（溝状遺構）覆土上層から出土。　８、砥石か。多面体を呈し、一部自然面が残る。



第12図　005・006・007遺構遺物実測図



第13図　遺構外出土遺物実測図(1)



第14図　遺構外出土遺物実測図(2)

第15図　石器実測図

第3章　小　　結

今回の調査では、当初、調査区に隣接する畑木向4号墳（003）の周溝と墳丘の一部が検出されることが予想された。そのため、古墳の形状と時期の判明を主たる目的として調査に望んだ。結果、古墳の築造以降、中世から近世段階の改変により、調査区内での古墳の遺存度が極めて低いことが判明した。古墳については、痩せ尾根上に展開する古墳群の変遷を考える上で貴重な機会であったが、この点については十分な成果は得られなかったといえる。しかし、それ以外を見ると、縄文時代早期後半、弥生時代後期、古墳時代前期・後期の遺物が出土したことは、隣接地の調査成果とも符合する。

また、今回の調査で、古墳周溝を大きく掘削して造られた002（溝状遺構）は、中世から近世の間という大まかな時期でしか捉えられないが、地形との関係を見ると、台地の平坦部から斜面部への変換点に位置し、また、溝の中心軸方向が、平成9年度調査区の時期不明溝状遺構（34号遺構）と約90°振れる関係である事から（第3図）、これらを同時期と見れば、台地平坦部を取り囲む何等かの区画溝であると考えられる。これ以上溝の時期、性格等不確定であるため、この遺構について現時点では言及できないが、その関連性が注目される。

北見一弘　『平成10年度　市原市内遺跡発掘調査報告』「畑木小谷遺跡」市原市教育委員会　1999.3

北見一弘・鶴岡英一

『市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡（第2次）』不特定遺跡発掘調査報告（3）「畑木小谷遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第73集　2000.3

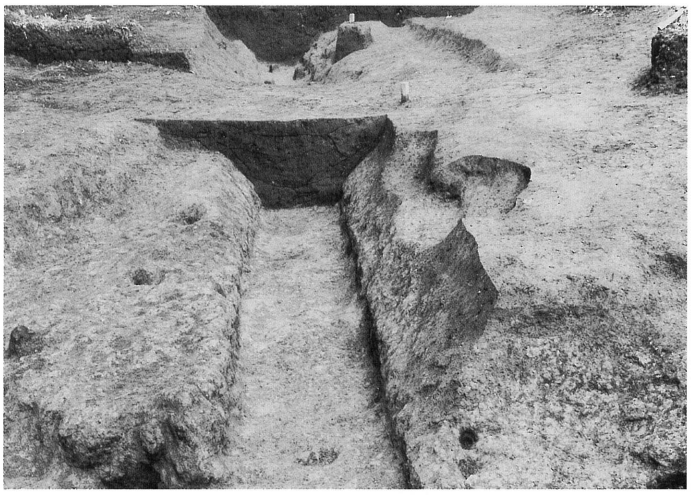
写　真　図　版

畑木４号墳調査前

１トレンチ　北から

２トレンチ　北から

調査区　墳丘下調査前　南から



002（溝状遺構）断面　南西から

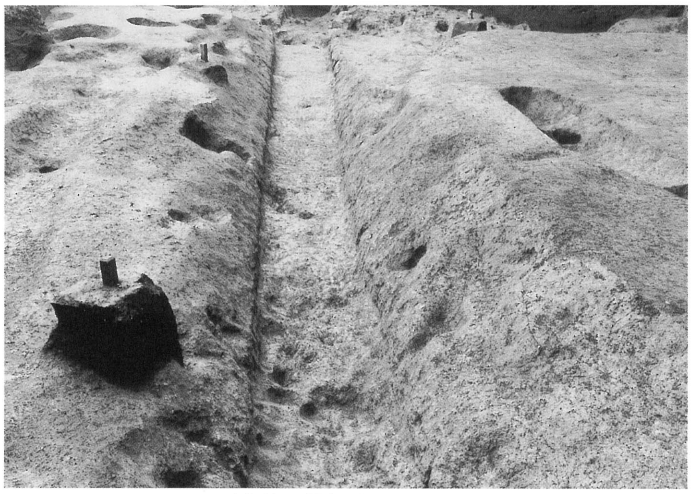
002、003断面　切りあい状況

002（溝状遺構）北東側

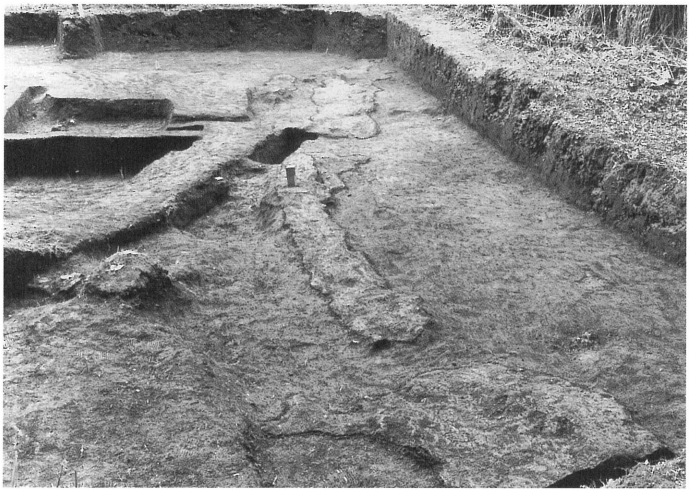
002溝調査区中央より南西をみる

図版 2

002（溝状遺構）調査区中央より南西をみる



002（溝状遺構）全景　北東から



007（溝状遺構）上層（硬化面）

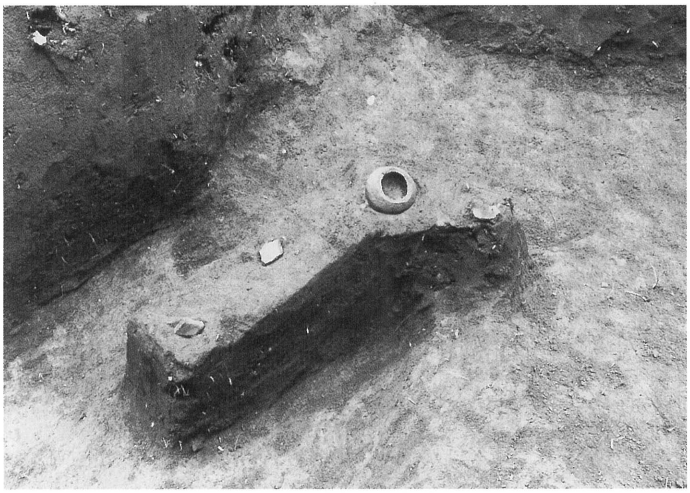
004（土坑）東から

004（土坑）手前　007（溝状遺構）調査区西側

005（溝状遺構）全景　南西から

006（溝状遺構）011（土坑）全景北東から

011（土坑）石鏃出土状況



005（溝状遺構）遺物出土状況　北から

010A・B（炉穴）北から

012（竪穴住居跡）北から

調査区東側

調査区中央

調査区東側

調査区全景

調査区東側

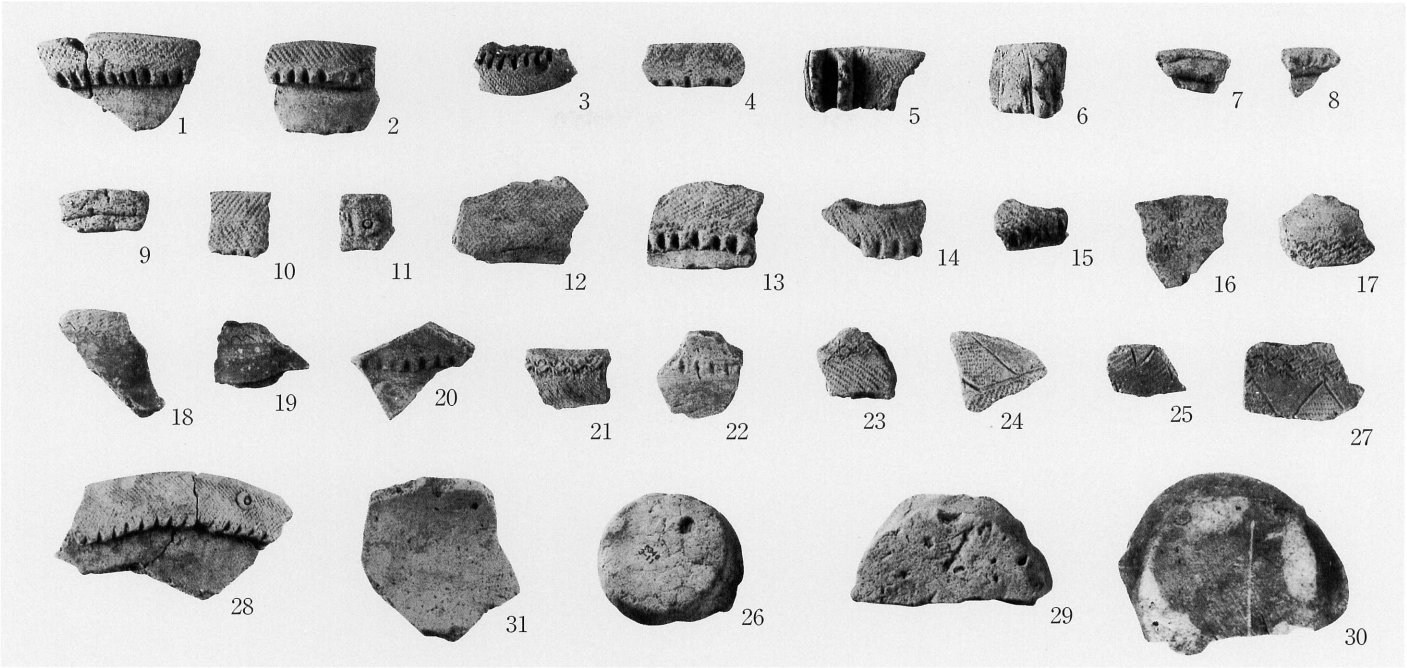
図版 4

010B－1　010B－2　010B－3　1　2　3　4
5　6　7　8　9　10　11
12　13　14　15　16　17　18　19
20　21　22　23　24　25　26　27
28　29　30　31　32　33
34　35　36　37　38　39

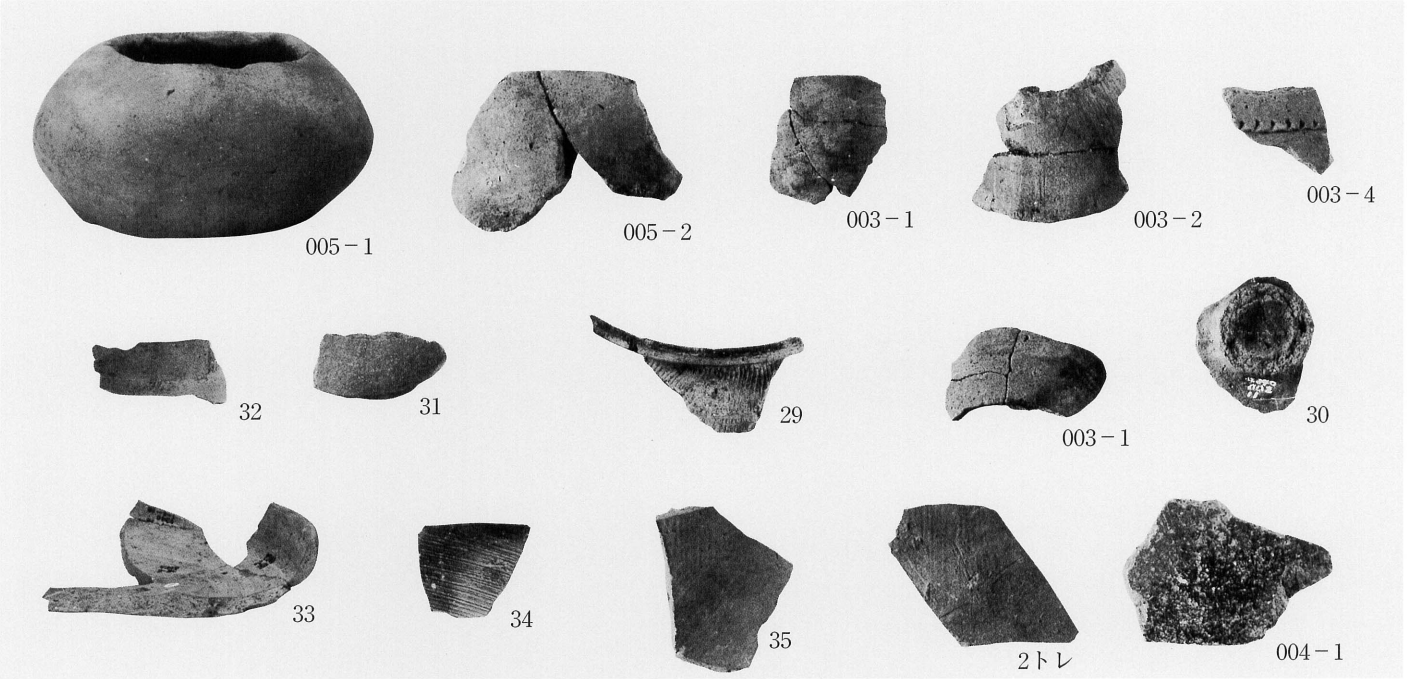
010B（炉穴）及び遺構外出土縄文土器

012－1　2　3　4
5　6　7
8　9　10　11

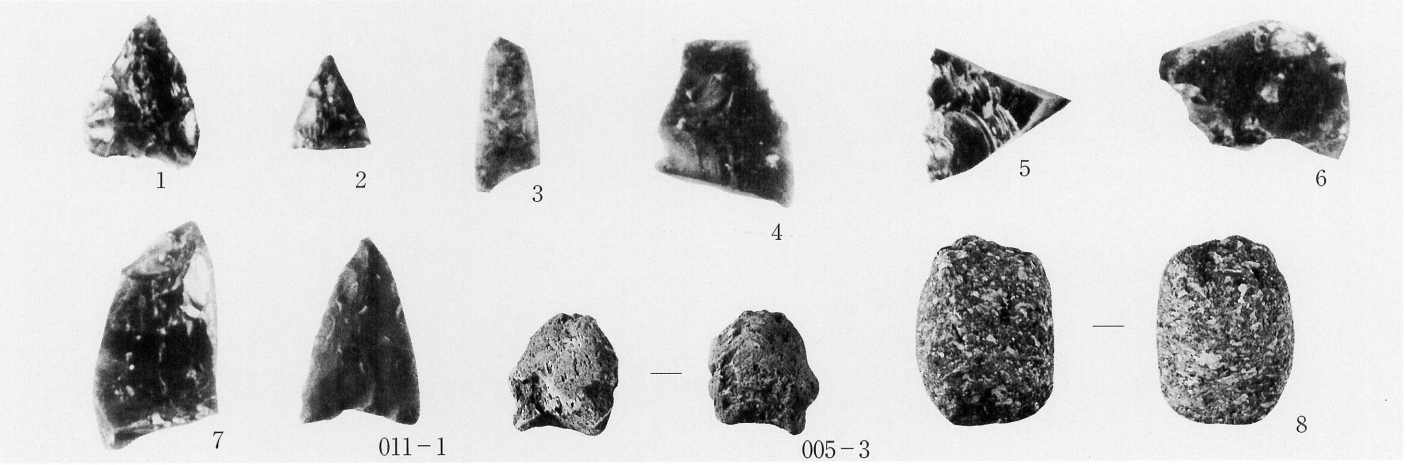
012（竪穴住居跡）出土弥生土器



遺構外出土弥生土器



003・004・005 遺構外出土 土師器・須恵器・陶器



010・011 遺構外出土石器

報告書抄録

ふりがな	いちはらしはたきこやついせき
書名	市原市畑木小谷遺跡Ⅱ
副書名	
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第81集
編著者名	北見一弘
編集機関	財団法人　市原市文化財センター
所在地	〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地　TEL0436-41-7300
発行年月日	2002年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
畑木小谷遺跡 (はたきこやついせき)	千葉県市原市畑木字向 247－2の一部ほか (ちばけんいちはらしはたき)	12219	セ340	35° 28′ 08″	140° 04′ 09″	20010509 ～ 20010606	201m^2	無線基地局建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑木小谷遺跡	集落跡 ・古墳	縄文時代早期後半　弥生時代後期 古墳時代後期	縄文時代早期後半炉穴２・土抗１ 弥生時代後期竪穴住居跡１軒 古墳時代後期古墳周溝１ 中・近世土坑１基 時期不明溝状遺構３条	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器	畑木小谷向古墳の墳形、時期の確定には至らなかったが、隣接調査区で検出された弥生時代後期の集落が台地先端部まで広がることがわかった。

財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第81集
市原市畑木小谷遺跡Ⅱ
平成14年３月11日　印刷
平成14年３月14日　発行
編集　財団法人　市原市文化財センター
発行　株式会社ツーカーセルラー東京
財団法人　市原市文化財センター
〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地
TEL0436（41）9000
印刷　株式会社エリート印刷